

ちよひといひ

第二三四号

娑婆の苦楽

人生、時に予期せぬ出来事が起こります。事故であれ、天災であれ、病死であれ、自死であれ、**家族親族との突然の別れ**には慣れ^な睦し恩愛の情、断つ事できず、追慕の念、並々ならぬ思いがのこります。最近でも『いじめに会い』自死を選択された生徒もいます。親が相手を恨み続けることが供養になるかと言えば恨みは恨みとして残るのみであります。断腸の気持ちは残れども、本人の魂を慰める供養にはならないと思います。**生前を慮り、丁重に供養の誠を捧げる**^{おもんばか}し**ありません**。八月は戦没者の追悼、御先祖のお盆供養をします。前にも紹介しましたが、本間憲一の詩に「遠い母さま お父さま お別れしてから夢の間に 永い月日が経ちました 灯ともし頃になりますと 頬を涙が流れます」と。いつまでも忘れずに供養していきたいものです。山頭火（種田正二）の生涯にも母の死が重くのしかかっていると思います。「母に罪はない、だれにも罪はない、悪いと言え、皆んなが悪いのだ、人間がいけないのだ。あゝ一切我今皆懺悔、私は、お位牌に頼ずいて涙するばかりである。あゝ亡き母の追懐（思えば）私一家の不幸は母の自殺から始まる」。母が自死した時、彼は十一歳でした。彼の言う通り、母の死後種田家は没落してしまつたのです。それから、母の追善供養が為されたのかどうかは分かりません。

市原悦子さんの著「ことばの宝物」から数ヶ所拾ってみました。「苦勞するのが人生、雑用しなきやいけないのも人生。努力するのは当たり前。そういうものだと思うから」、「ふたつ道があつて、お金にならない道を選ぶことができる人は幸せじゃないかしら。長く続ける、その途中にたくさん宝物がころがっているんですもの」、「死とは、自然に還っていくことなんだと、今、私はおもっています」と、まさしく、人生を金儲けの為と思わず、二度と繰り返しのきかない人生を無駄に使うようなことはせず、自分の人生は、自分を生かす為にこそ役立たすべきである。人生、苦あれば楽あり、生あれば死あり、男あれば女あり、今は両生類もあるかも、一は二があつて存在し、二は一があつての存在、**生は死ぬことが有つて存在し、生きていることがなければ、当然死ぬこともない**。そこに無常観が存在するのである。

参議院選挙が終わりました。当選された方に祝辞として一言申し上げます。兵法「三略」に「道・徳・仁・義・礼と、五つのものは一体なり。道は人の踏む所なり。徳は人の得る所なり。仁は人の親しむ所なり。義は人の宜しき所なり。礼は人の体する所なり。一つも無かる（欠ける）べからず」。真鍋呉夫氏は「君主が臣下に与える指令のことを（命）という。また、これを文章に記録したものを（令）という。これを天下に施行することを（政）という。したがって、君主の（命）が正しくなければ（令）として記録されず、（政）として施行されることもない。道が貫かれることもない。道が貫かなければ、姦臣（悪人）がのさばる。のさばれば君主としての威厳がそこなわれる。だから人の上に立つ者は、道・徳・仁・義・礼の五つの徳を身につけて、自分を正すことが大切なのである」と。

令和元年八月一日 善壽界善入院油掛地藏尊